

シチズンシップ教育推進のための研究

— カリキュラム開発と実践 —

三 堀 仁¹

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において、通常の教科等の指導の中でシチズンシップ教育を行うためのカリキュラムを開発し、授業実践を行った。その結果、シチズンシップ教育のポイントを押さえた指導計画を作成し、児童・生徒の「切実感」「自発性」「責任感」といった意識の流れと、それに対応した問題解決的な学習活動の流れを大切にした指導をすることによって、実践が可能であることが明らかになった。

はじめに

平成 20 年 1 月に出された中央教育審議会答申で、「生きる力」をはぐくむという理念の重要性が再確認された。その背景として、現代は「知識基盤社会」の時代であるということが強調された。

「知識基盤社会」の特質としては、グローバル化、競争と技術革新、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断の必要性などが挙げられる。このような社会では、一人ひとりが自己責任を果たし、国や地域社会の課題の解決に主体的に参画する態度を身に付けることが期待されている。

急速に変化する社会の中で、個人が自立・自律し、主体的に社会参加する力を身に付けるために、今注目されているのが「シチズンシップ教育」である。経済産業省では、すでに平成 18 年 3 月に「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」（以下「報告書」という。）をまとめ、学校や地域社会、企業等において、その普及に向けた提言を行っている。また、一部の学校では、シチズンシップ教育に取り組み始めている。

神奈川県では、特に高等学校において、平成 19 年度からキャリア教育の取組の一環として「シチズンシップ教育」を推進し、実践研究校を中心に実践を積み重ねている。なお、本研究での用語は、神奈川県教育委員会が使用している「シチズンシップ」とする。

研究の目的

「報告書」ではシチズンシップを次のように定義している。

多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的に（アクティブに）関わろうとする資質

（経済産業省 平成 18 年 p.20）

「報告書」には、具体的な実践事例の紹介はないが、「プログラム例」として簡潔にまとめた学習活動例が多く掲載されており、シチズンシップ教育とは何かをイメージするのに役立つものとなっている。

また、お茶の水女子大学附属小学校では、「提案や意思決定の学びを通して市民的資質を育む教科」として、また、品川区立小中一貫校では、道徳、総合的な学習の時間、特別活動を融合させた品川区独自の教科の中で、シチズンシップ教育の実践を始めている。先進校では、こうした独自教科の設定が目立っている。

神奈川県では、平成 19 年 8 月、明日のかながわを担う人づくりを進めるために、「かながわ教育ビジョン」を策定した。これを受けた「県立高等学校学校運営の重点課題」の中に「キャリア教育の推進」がある。高等学校段階において、「生徒が生きる力を身に付け、さまざまな課題に柔軟かつ意欲的に対応し、社会人・職業人として自立していくこと」が求められる現状を受け、「社会への移行の準備」としてキャリア教育が重視されている。その一環として、社会参加のための能力と態度を育てることを目指して「シチズンシップ教育」が位置付けられている。

神奈川県の高등학교のシチズンシップ教育は、平成 19 年度より、県立高等学校 8 校が実践研究校となって「社会参加や政治意識を高める取組」「経済・金融教育」「モラル・マナー教育」を重点テーマに研究を進め、成果を上げている。

そこで、高等学校だけでなく他の校種においても、また、特別な教科を設定することなく通常の教科等の中においてもシチズンシップ教育を実践することができるようにすることが大切であると考え、カリキュラムの開発を行うこととした。

本研究は、「報告書」の提言等を参考にしつつ、通常の教科等の指導の中で実施できるシチズンシップ教育のカリキュラムを開発し、それを小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の中で実践し、検証を行うことを目的とした。

1 カリキュラム支援課 指導主事

研究の内容

1 シチズンシップ教育のカリキュラム開発

通常の教科等の学習の中でシチズンシップ教育を行うためには、カリキュラム開発が必要である。本研究では、「報告書」等の内容を踏まえながら、カリキュラムの構成要素である「目的」「内容」「方法」「評価」の4点からシチズンシップ教育を整理した。

(1) 目的

本研究では、シチズンシップ教育の目的を次のように設定した。

シチズンシップを発揮するために必要な能力や態度を身に付けることを目的とした教育

第1表 シチズンシップを発揮するために必要な能力

意識	自分自身に関する意識
	向上心、探究心、学習意欲、労働意欲 等
	他者とのかかわりに関する意識
	人権・尊厳の尊重、多様性・異文化の尊重、他者に対する敬意と寛容、相互扶助意識、ボランティア精神 等
社会への参画に関する意識	法令・規範の遵守、政治への参画、社会に関与し貢献しようとする意識、環境との共生や持続的な発展を考える意識 等
	公的・共同的分野での活動に必要な知識
知識	教養・文化・歴史、思想・哲学、社会的規範、ユニバーサルデザイン、環境問題、まちづくり、NPO・NGO 等
	政治分野での活動に必要な知識
	わが国の民主主義の仕組み（国民主権、代議制、三権分立、選挙制度、政党など）、国民の権利・義務、基本的な法制度、政府の仕組み（内閣、府省、財政など）、住民運動、住民参加、情報公開、戦争と平和、国際紛争、海外の政治制度 等
	経済分野での活動に必要な知識
スキル	市場原理、景気、資本主義の仕組み、ポーターレス経済、消費者の権利、労働者の権利、多様な職業の存在と内容、税制、社会保障制度（年金、保険等）、金融・投資・財務、家計、医療・健康（薬物や食を含む）、各種ハラスメント、犯罪・違法行為、CSR（企業の社会的責任） 等
	自己・他者・社会の状態や関係性を客観的・批判的に認識・理解するためのスキル
	自分のことを客観的に認識する力、他者のことを理解する力、ものごとを俯瞰（ふかん）的にとらえ全体を把握する力、ものごとを批判的に見る力 等
	情報や知識を効果的に収集し、正しく理解・判断するためのスキル
スキル	大量の情報の中から必要なものを収集し、効果的な分析を行う力、ICT・メディアリテラシー、価値判断力、論理的思考力、課題を設定する力、計画・構想力 等
	他者とともに社会の中で、自分の意見を表明し、他人の意見を聞き、意思決定し、実行するためのスキル
	プレゼンテーション力、ヒアリング力、ディベート力、リーダーシップ、フォロワーシップ（多様な考え方や価値観の中で、批判的な目でチェック機能を果たしたり、リーダーの意を汲（く）んで行動したり、適切な役割を果たす力）、異なる意見を最終的には集約する力、交渉力、マネジメント力、紛争を解決する力、リスクマネジメント力 等

「報告書」を基に作成（経済産業省 平成18年 p.24）

シチズンシップ教育を各教科等の中で取り組む場合、単元目標や本時目標は、当然各教科等の目標となる。その目標に迫る過程で、シチズンシップを発揮するために必要な能力を身に付けることができるようにしていくのである。

「報告書」によれば、必要な能力とは第1表のように意識、知識、スキルに分類され、これらをバランスよく獲得しながらシチズンシップを最大限に発揮することによって、自己実現し、また、よりよい社会の実現へ寄与していくことができるとしている。

(2) 内容

シチズンシップ教育をどのような活動を通して行うかという内容面について、本研究では「報告書」を基に次の三つとした。

① 公的・共同的分野での活動（社会・文化活動）

市民のニーズや社会的な課題へ対応するために、市民一人ひとりが自分たちの意思に基づいて、関係者と協力して取り組む活動

② 政治分野での活動

自分たちの生活を左右したり社会の仕組みに影響を及ぼしたりする政策に、自分たちの意思を反映しようとする活動

③ 経済分野での活動

自分たちの生命や資産を守り、社会全体にとってプラスと考えられる消費・生活行動を実現する活動

(3) 方法

ア 学習活動に際しての留意点

シチズンシップ教育においては、「何を学ぶか」とともに、「どのように学ぶか」ということが重要である。したがって、学習活動は、児童・生徒がテーマを自分たちの問題として受け止め、主体的、共同的に取り組むような展開が求められる。そのためには、児童・生徒が「切実感」「自発性」「責任感」を持って活動できるようにすることが大切であるととらえた。

① 切実感

「現実に直面する問題を自分たちの力で解決したい」という思いや願いが大切である。これがよりよい社会の実現に寄与する個人を育てることにつながる。

② 自発性

「自分から進んで行動する」という態度が大切である。これが社会における意思決定に積極的に参画する個人を育てることにつながる。

③ 責任感

「自分たちで決めたことやできることを実行しよう」という意思が大切である。これが自立・自律した個人を育てることにつながる。

イ 学習活動の形態

シチズンシップ教育の学習活動は、知識習得型学習、シミュレーション型学習、体験型学習、プロジェクト

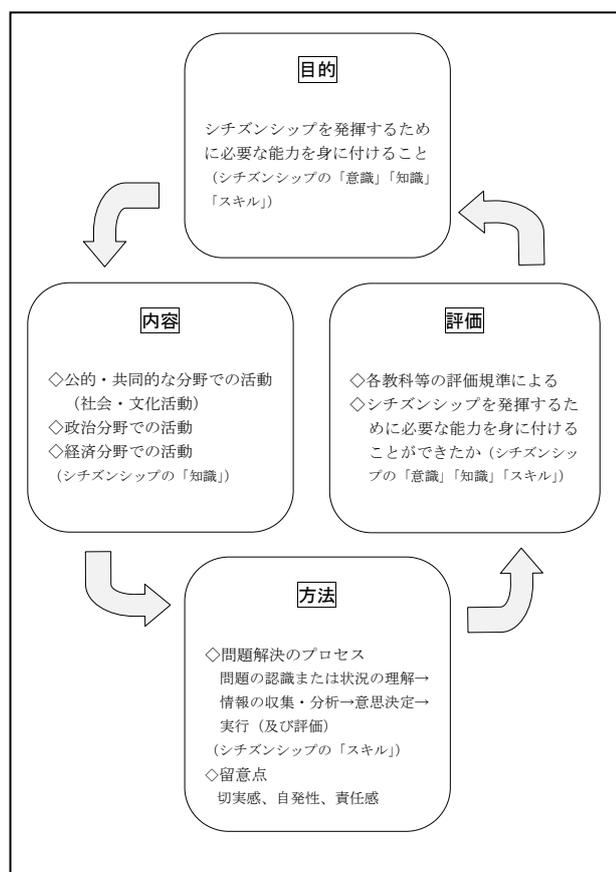
型学習など多様な形態が考えられる。

「報告書」に「シチズンシップを発揮するために必要な能力のうち、知識やスキルを身に付けるためには、ある程度の体系的かつ長期的な教育が必要」とある。教科等の学習活動においては、知識習得型学習やシミュレーション型学習が取り入れやすいと言えるが、児童・生徒が受け身にならないよう意識を高めていくことが大切である。総合的な学習の時間の中では、体験型学習やプロジェクト型学習を行うことが可能であるが、社会参加や実践ができるような工夫が必要である。

ウ 学習活動のプロセス

「報告書」に示されている「認識・理解のスキル」「情報・知識の収集、理解・判断のスキル」「意思決定、実行のスキル」の三つのスキルをつなぐと、問題解決のプロセスとなる。すなわち、スキルを身に付けるためには、単元の展開が問題解決的な学習で進められることが効果的であると言える。

ここでは、当センターの平成19年度の「問題解決能力を育成するための実践的研究」の研究成果を基に、シチズンシップ教育の学習プロセスを、「問題の認識または状況の理解」「情報の収集・分析」「意思決定」「実行（及び評価）」の四つでとらえた。



第1図 シチズンシップ教育のカリキュラムの構成要素 (目的・内容・方法・評価を整理したもの)

(4) 評価

シチズンシップ教育といっても教科等の中で行われる学習活動の評価は、単元目標に対しての評価であるので、教科等の観点別評価規準に基づいて行う。

シチズンシップを発揮するために必要な能力である「意識」や「スキル」、「知識」は、各教科等の評価の観点（「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」など）の中に、具体的な児童・生徒の姿として表現することができる。つまり、それぞれの評価規準に基づいて評価した結果、満足できるものであれば、シチズンシップを発揮するために必要な能力を身に付けたということができると考える。

2 シチズンシップ教育の実践

第1図に示したカリキュラムの構成要素を単元指導計画に反映させていくことによって教科等におけるシチズンシップ教育が可能となるとの考えに基づき、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の各校において実践した。ここでは、その中から小学校の社会の例を以下に紹介する。

(1) 単元指導計画

○単元名

第5学年「わたしたちの生活と工業生産 自動車をつくる工業」

○単元目標

- ・自動車工業に従事している人々の工夫や努力、自動車生産を支える貿易や運輸について調べ、工業生産が国民生活や産業を支える重要な役割を果たしていることが分かるようにする
- ・安全や環境保全、持続可能な発展を考えながら、これからの自動車工業について考えることができるようにする

○評価規準

- ・自動車がどのような努力と工夫によって生産されているか興味を持って調べようとしている (関心・意欲・態度)
- ・新しく開発される自動車について興味・関心を持ち、情報を集めるとともに、自らのアイデアをいかした自動車をデザインしようとしている (関心・意欲・態度)
- ・新しい自動車の開発について調べたことを基に、自分なりのアイデアをいかして、これからの自動車開発について提案している (思考・判断)
- ・現在の自動車工業の様子、生産過程の工夫や努力について適切にまとめている (技能・表現)
- ・自動車の開発・生産の現状、それに携わる人々の工夫や努力、これからの自動車開発について理解している (知識・理解)

○シチズンシップ教育の視点 (シチズンシップ教育として必要な意識、知識、スキル)

〔意識〕 社会への参画

〔知識〕 公的・共同的分野、経済分野

〔スキル〕

〈問題の認識または状況の理解〉

- ・自動車工場での自動車生産や新しい自動車開発の様子を調べることによって、安全性や環境問題に対応した自動車の開発がこれまで以上に求められることを認識することができる

〈情報の収集・分析〉

- ・新しい自動車を開発する企業の取組を調べ、これからの自動車工業に求められることは何かを考え、それにこたえた自分なりの自動車をデザインすることができる

〈意思決定〉 〈実行〉

- ・自分がまとめた具体的な改善案を、新たな提案として社会に提案することができる

○学習活動の流れ

①「私たちの生活と工業製品」〔1～3時間〕

- ・自動車を生産する工場の人々は、消費者や社会のニーズにこたえるため、様々な工夫をしていることを理解する（状況の理解）

②「自動車の生産と開発」〔4～5時間〕

- ・工場では、現在、どのような自動車を開発しているのかを調べてまとめる（情報の収集・分析）

③「人に優しい自動車への提案」〔6～10時間〕

- ・安全面や環境面から考えたこれからの自動車について、児童なりに調べたことを基にアイデアをまとめ、工場や行政機関に発信する（意思決定、実行）

(2) 学習の実際

アイデアをまとめる作業では「持続可能な社会」を意識して、児童はそれぞれ自分なりの考えを出すことができた。自動車の生産や開発について学習を進めてきたということもあって、環境と安全に配慮した自動車についてのアイデアが多かった。

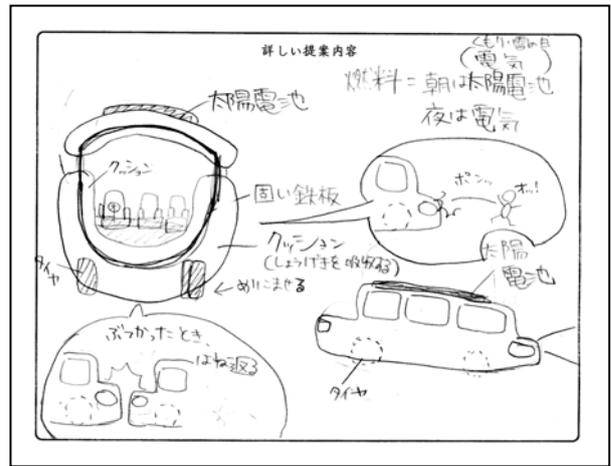
単元の流れの中で、第2図のようなワークシートを使って、ハイブリッドカーや燃料電池車などについても学習した。それを踏まえて、環境に優しい自動車を考えた。アイデアを出すときには「これは無理だ」「そんなのあり得ない」などとは考えずに、自由に発想することが大切

ハイブリットカー	
特長	ガソリンをなるべく使わない 電モーターでガソリンエンジンを併用 エンジン音がしずか、燃費がいい
改善する点	ねだんが高い。CMをながす。
燃料電池車	
特長	水素と酸素で電気をあつす。 二酸化炭素を出さない。
改善する点	ねだんが高い。CMなどで分かりやみ説明 水素、酸素スタンドを作る
電気自動車	
特長	家庭の電気で充電してモーターで走る 排出ガスは全くない。
改善する点	ねだんが高い。すぐに充電できない。 電気スタンドを作る。CMをながす。

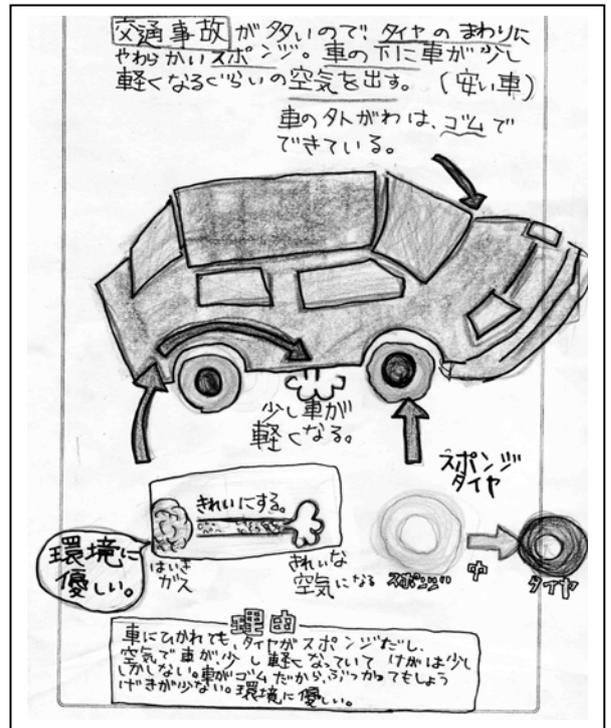
第2図 ワークシート

であると教師は助言した。

具体的に見ると、第3・4図のように、自動車のかたちを安全面から工夫しているものや、排気ガスをクリーンにするもの、リニアモーターカーの仕組みを取り入れるものなど、子どもらしいアイデアが数多く出された。また、信号や道路に工夫を凝らして交通事故を減らすことを目的としたものや、目の不自由な人が運転できる自動車などのアイデアもあった。中には、飲酒運転防止のために息を吹きかけないと動かない車や、運転者が見にくいところにカメラを付けるなど、既に実際に取り入れられているアイデアも出たが、これらについても児童自身が考えたアイデアとして認めた。



第3図 児童のアイデア



第4図 児童のアイデア

児童のアイディアは「私の提案」として、個人のカードにまとめた。この提案を発信する方法としては、手紙や電子メール、ホームページへの書き込みなどの意見が出されたが、電子メールやホームページでは、文章表現が中心となるので自分の提案が上手に表現できないといった理由や、せっかく書いたカードをいかしたいということから手紙にすることとなった。絵や文で説明したこれらのカードに手紙を添えて、その内容によって市長や自動車会社へ送付することとした。

児童の提案に対して、市長から回答が届いた。

さっそく送られてきた返事の手紙に、児童は「本当にお手紙が来た」「私たちの提案を読んでくれた」と大喜びであった。

自分たちがアクションを起こしたことに対する反応があったことで、社会参加したという実感を味わうことができた。

特にありがたかったのが、単に児童の提案を受け止めるだけではなく、市が現在取り組んでいることを分かりやすく示してくれた点、また、実現性の乏しい提案について理由を添えて明確に困難さを説明してくれた点である。児童は現実を直視し、社会に参加することの難しさを実感できたのである。

(3) 実践後の考察

環境問題については、小学校においても身近な問題として、資源分別回収やエコキャップなどの取組を進めている。しかし、多くの児童は、二酸化炭素排出量が増大して地球温暖化が進んでいることを情報としては知っているものの、自分がどのようにかかわっていけばよいのかという具体的な方法を知っているわけではなく、切実感もなかった。当然、自分の考えを発信するのは「教室の中で」というとらえであった。

本単元では、学習したことを基に自分から外へ提案するという目的を設定したことにより、児童はそれを新鮮に受け止め、自発的に取り組んだ。いろいろな情報を収集することはもとより、工場見学の際にも、製造工程に感嘆するだけでなく「こうすればよい」という自分の視点を持ちながら見学する児童もいた。自らが学習したことやこれまでの経験を基に思考を深めることができ、とても有意義であった。また、外に向かって提案するということに重みを感じた児童は、自分の提案に責任を持つという意識が生まれてきた。

具体的な提案を考えるに当たって、教師は、児童の自由な発想を大切にし、どのようにすれば人と環境に優しい車社会を実現できるかというアイディアを出させるようにした。児童からは、一見実現不可能かとも思われるアイディアもあれば、現実的なアイディアもあった。もう少し時間数を確保することができれば、さらなる調査を行い、受ける側に「なるほど参考になる」と受け止めてもらえるような具体的な提案とすることができたであろう。

このように見ると、学習したことをまとめたり発表したりして単元を終わることが多かったこれまでの学習活動に、シチズンシップ教育として一歩外に踏み出す活動を加えたことで、頭の中での理解にとどまっていた内容が、実感をともなった理解になり、学習指導要領の社会の内容をより深めることになったと言える。

本単元は、小学校学習指導要領社会の第5学年の内容(3)のウを扱ったものであるが、同時に単元展開に当たって、シチズンシップ教育のカリキュラムの構成要素(第1図)を取り入れたものである。

内容面では、環境問題や消費者の視点から設定した「これからの自動車」というテーマは、公的・共同的な分野、経済分野の活動である。学習活動の方法としては問題解決的な取組がなされるように、評価規準の中に、「興味を持つ」「情報を集める」「アイディアをいかす」「提案する」という具体的な言葉で四つのプロセスを織り込んだ点に意味がある。したがって、評価も単元目標への評価と同時に、シチズンシップ教育の内容や方法の面で期待する児童像の評価にもなった。

本単元は、社会の学習に、シチズンシップ教育のカリキュラムの構成要素を無理なく織り込んだ実践であり、児童に社会と能動的にかかわる経験をさせることができた事例と言えるであろう。

今後さらに児童が積極的に社会に参加するためには、様々な事象を知り、自ら経験を重ねることが重要であると考えられる。その上で、自ら考えたことを的確によりよい手段で伝えていくことが必要である。今回、児童にとっての「社会」は、自動車会社や市であったが、発達段階に応じて、身近な地域、市町村、国といった段階を経る系統的な指導を考えることも必要なことであろう。

研究のまとめ

本研究では、各校種において同様の実践を行った。その結果、次のことが言える。

①教科の単元目標の達成

シチズンシップ教育のカリキュラム開発を行い、各校種で実践を行った結果、学習活動が充実し、その教科の単元目標の達成に大きな役割を果たした。単元目標とシチズンシップを重ね合わせるには評価規準を工夫することが大切である。

②発信・行動へ向けた学習活動

シチズンシップ教育では、対象に積極的にかかわるという姿勢が大切である。最終的なゴールとしては、児童・生徒自らの発信や行動が期待される。そうした行動につながる学習活動が大切である。

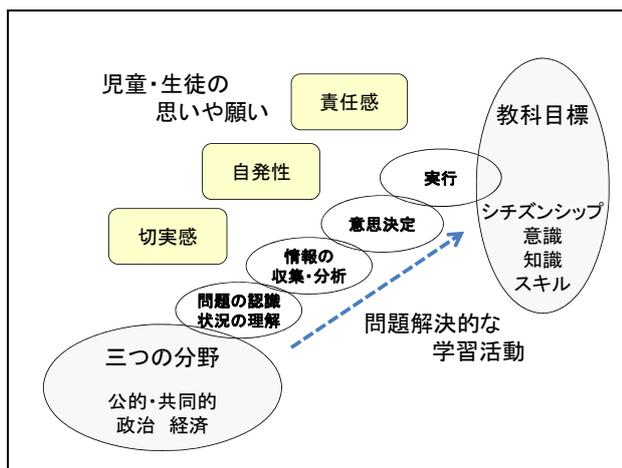
③児童・生徒の思いや願いの尊重

児童・生徒自らが発信し行動するためには、児童・生徒の「なんとかしたい」という切実感が重要である。さらに、自発性・責任感を持たせるような指導をすることによって、学習したことが発信や行動に結び付いていくと言える。

④問題解決的な学習活動

発信や行動の段階にたどり着くためには、問題解決的な学習活動が有効である。実行の後にはまた新たな問題が見えてくるであろうし、日常の生活態度や意識にもつながるものもある。

シチズンシップ教育の学習活動の流れをまとめると、第5図のように図式化することができる。



第5図 シチズンシップ教育の学習活動の流れ

こうした点を確認した上で、今後のシチズンシップ教育のカリキュラム開発における課題としては、次のような点が挙げられる。

①発達段階に応じた扱い

シチズンシップ教育を、児童・生徒の発達段階に応じて、発展性のあるものにしていく必要がある。扱う分野だけでなく、スキルについても小学校の低学年から中学校や高等学校のそれぞれの段階で、どのような力が求められるのかを整理することが必要である。

②教科間の関連性

シチズンシップ教育は、社会や技術・家庭(家庭)、特別活動、総合的な学習の時間といった限られた教科等で行うのではなく、どの教科でも実践可能である。教科間の関連を意識し、学年の年間計画をどのように立てるかといった点も、今後のシチズンシップ教育のカリキュラム開発研究の一つのテーマとなるであろう。

おわりに

本研究を踏まえて当センターでは『「シチズンシップ教育」推進のためのガイドブック』を作成した。小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の実践例を紹介してあるので参照していただきたい。

なお、今年度、本研究を進めるに当たっては、6名の調査研究協力員の方々のほかに、お茶の水女子大学准教授富士原紀絵先生にスーパーバイザーとしてご指導・ご助言をいただいた。感謝の言葉を申し添えたい。

[調査研究協力員]

秦野市立渋沢小学校	山口 善弘
厚木市立厚木小学校	船津 慎一
平塚市立金旭中学校	小林 真弓
松田町立松田中学校	中津川 明
寒川高等学校	坂野 一之
麻生養護学校	長谷川智一

[助言者]

お茶の水女子大学 富士原紀絵

引用文献

経済産業省 平成18年『シチズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書』
http://www.meti.go.jp/press/20060330003/citizenship-houkokusho_honpen-set.pdf
 (URLは2008年11月取得)

参考文献

相原実 2008「シチズンシップ教育に関する調査研究」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第27集)
 安全・安心で持続可能な未来に向けた社会的責任に関する研究会 2008「安全・安心で持続可能な未来に向けた社会的責任に関する円卓会議の開催に向けて(案)」
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/shingikai/kikaku/21th/080311shiryo04.pdf>
 (URLは2008年11月取得)
 神奈川県「シチズンシップ教育の推進神奈川県の取組」
<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kokyoku/kenritu/citizenship/kanagawa.html>
 (URLは2008年11月取得)
 神奈川県立総合教育センター 2008『「問題解決能力」育成のためのガイドブック』
 経済産業省 平成18年『シチズンシップ教育宣言』
<http://www.meti.go.jp/press/20060330003/citizenship-sengen-set.pdf> (URLは2008年11月取得)
 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議 2006「わが国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/keikaku.pdf> (URLは2008年11月取得)